

令和5年度動物取扱責任者研修会

人と動物の共通感染症 について

人と動物の共通感染症に関するガイドライン

平成19年3月

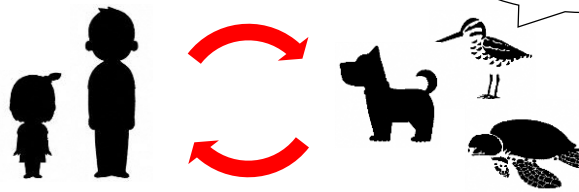
環 境 省

この講義では、
ガイドライン内容+αについて
説明します

説明していない感染症もあります
[こちら](#)から各自確認してください



人と動物の共通感染症とは



「人と脊椎動物との間で自然に移行する感染症」



感染症によって症状は様々

人と動物の共通感染症と病原体の種類

病原体	引き起こされる感染症の例
ウイルス	狂犬病・日本脳炎・高病原性鳥インフルエンザ ウエストナイル熱・ 重症熱性血小板減少症 (SFTS) など
リケッチア・ クラミジア	日本紅斑熱・つつが虫病・ オウム病 など
細菌	ペスト・ サルモネラ症 ・ レプトスピラ症 猫ひっかき病 ・ブルセラ症・細菌性赤痢など
真菌	皮膚糸状菌症 ・クリプトコッカス症など
寄生虫	トキソプラズマ症・回虫症・エキノコックス症 疥癬 など

疾患としては200以上存在する

本日の目的

次の7つの人と動物の共通感染症について、

- ・ 病原体
- ・ 発生事例
- ・ 感染経路
- ・ 人の症状
- ・ 動物の症状
- ・ 感染対策

を理解し、**動物取扱業者での発生を防ぐ**

本日のお題

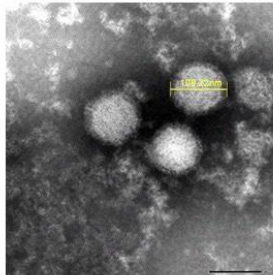
- ① 重症熱性血小板減少症（SFTS）
- ② オウム病
- ③ サルモネラ症
- ④ 猫ひっかき病
- ⑤ 皮膚糸状菌
- ⑥ レプトスピラ症
- ⑦ 疥癬

重症熱性血小板減少症（SFTS）

病原体

- ・ SFTSウイルス
（ブニヤウイルス科フレボウイルス属）

図1. SFTS患者から分離されたSFTSVの電子顕微鏡検査による形態



引用：国立感染症研究所

重症熱性血小板減少症（SFTS）

引用：国立感染症研究所

②発生状況

主に**西日本**に分布

静岡県・愛知県（2021年）
富山県（2022年）
東日本に拡大傾向

夏季に発生が多い

少数だが**冬季**にも発生

図3. SFTS届出症例の推定感染地域 (n=900, 2022年7月31日現在)

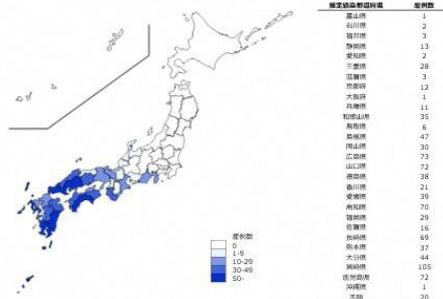
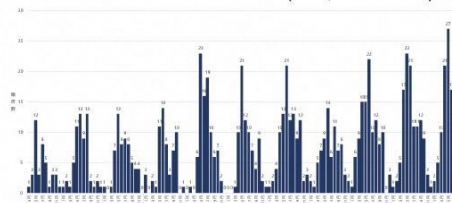
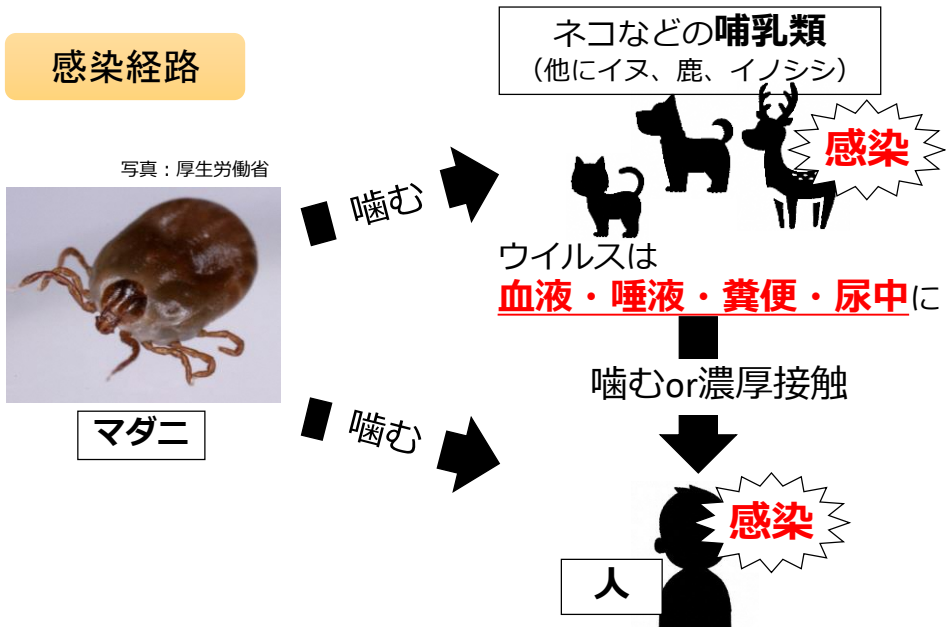


図1. 2013年3月4日以降に届け出られたSFTS症例の発病時期 (n=887, 2022年7月31日現在)



重症熱性血小板減少症（SFTS）

感染経路



重症熱性血小板減少症（SFTS）

人の症状

- ・ 潜伏期間：6日～14日
- ・ 症状：**発熱と消化器症状（嘔吐・下痢）**が中心
その他、神経症状やリンパ節腫脹、出血症状
がみられることも。
- ・ 血液検査：血小板数減少、白血球数減少
- ・ **致死率：約30%程度**
- ・ **現時点でワクチン、治療法なし**

動物の症状

- ・ **人とほぼ同様の症状**

重症熱性血小板減少症（SFTS）

予防～人が感染しないために～

（引用：厚生労働省）

□ 森、河川敷、公園にも生息

□ 肌の露出を少なくする

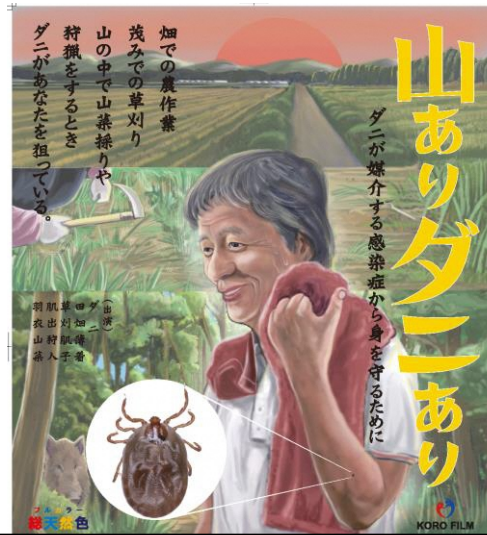
→長袖・長ズボンだけでなく
帽子・手袋も着用する

□ 足を完全に覆う靴を履く

→サンダル等は避ける

□ 明るい色の服を着る

→マダニを目視確認しやすくする
屋内に持ち込まない

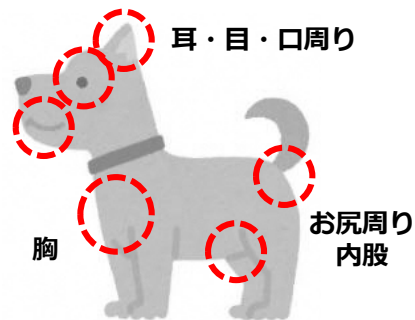


重症熱性血小板減少症（SFTS）

予防～ペットが感染しないために～

□ 定期的な駆除薬投与

□ 散歩後は必ずマダニを確認

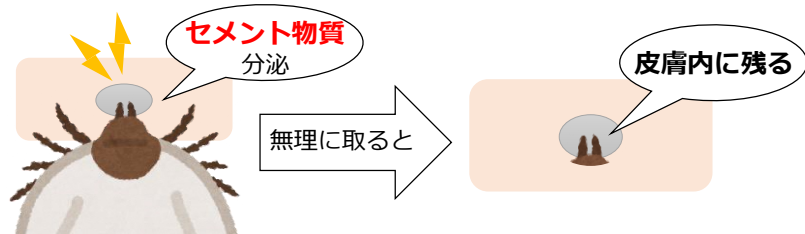


市販のマダニ対策薬は効果が△
できれば動物病院の処方薬を

毛が少ない部位は寄生しやすい

重症熱性血小板減少症（SFTS）

□ そのマダニ、引っ張って取らないで！



噛む・吸血開始
※痛みがないことも

口器がちぎれる
化膿・SFTSなどの感染症リスク↑

- 必ず**医療機関**で除去・洗浄してもらう
- 噛まれてから数週間は体調の変化に注意をして
発熱等の症状があれば受診する

重症熱性血小板減少症（SFTS）

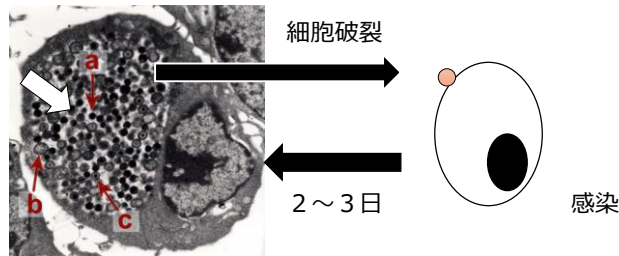
予防～ペットから感染しないために～

- 過剰なふれあいは避ける
 - ・口元を過剰に舐めさせる
 - ・口移しで食べ物を与える
 - ・スプーンや食器を共有する など
- ペットを触ったら手を洗う
- 体調不良と感じたら速やかに受診する

オウム病

病原体

- ・ オウム病クラミジア (*Chlamydia psittaci*)
 - ×オウムだけ ◎ほぼすべての鳥類に自然感染
- ・ 細菌とウイルスの中間的な性質を持つ
- ・ 感染症法：4類感染症に指定（医師は保健所に届け出る）



写真：国立感染症研究所

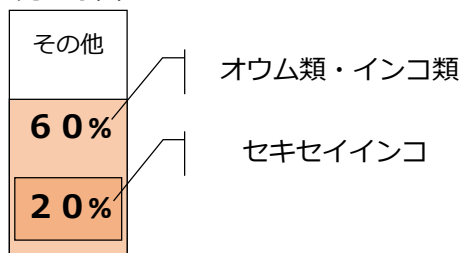
オウム病

発生状況

年間20～30例程度

※軽症例は確定診断されずに届出されない場合がある

発生原因



野生ドバトの保菌率



- 鳥類展示施設等で集団発生（2001年、2005年）→次スライドで説明
- 動物がいない福祉施設での集団発生事例も

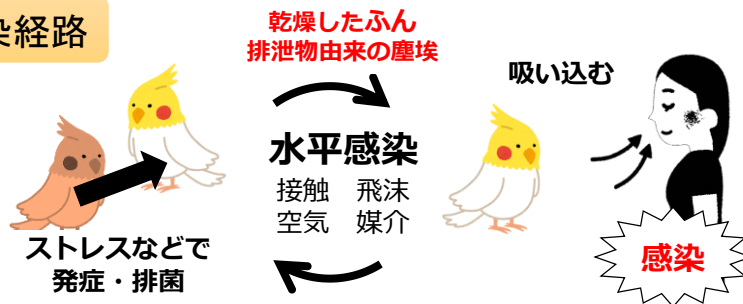
オウム病

集団発生事例

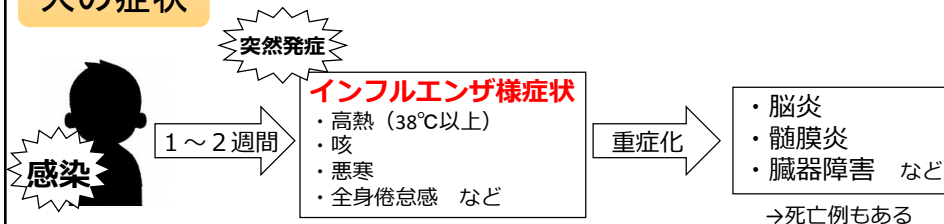
2002年	展示施設での集団感染としては 国内初事例	
	場所	島根県の鳥類展示施設 ふれあい可能な展示・飼育施設
	感染被害	施設従業員 5 名、一般来園者 1 1 名
	結果	半年に30万人もの観客が訪れる人気の施設だったため、一連の事故はニュースとして報道され、一時閉鎖となったその後、再発防止策を整備・再開
2005年	場所	兵庫県の鳥類展示施設 ふれあい可能な展示・飼育施設
	感染被害	施設従業員 3 名
	経緯	開園時にあたり環境省基準に基づく指導を行っていたが、 事故防止に必要な設備が未整備 従業員に対し、共通感染症を予防するための教育なし 飼育鳥、従業員ともに健康管理不十分
	結果	再発防止策整備・開園

オウム病

感染経路



人の症状



オウム病

動物の症状

- 鳥類：感染していても、基本的に症状はみられない（**不顕性感染**）
- 栄養不良等が原因で発症：運動量や食欲低下、消瘦、下痢、呼吸困難など
- **ふんに大量のクラミジア**を排出する
- 適切な治療をしないと1～2週間で死亡する場合がある

感染対策

適正飼養で十分に予防可能

- ① 過剰なふれあいは控える
- ② ふれあい後は手洗い
- ③ 鳥かごはこまめに掃除する
- ④ 飼養している鳥の具合が悪い場合はすみやかに診察

サルモネラ症

病原体

細菌：サルモネラ

さまざまな動物の**腸管内**に存在

糞便を介して自然環境にも



牛・豚
数%前後



鶏
10～35%



犬
0.6～27.6%



猫
0.5～3%

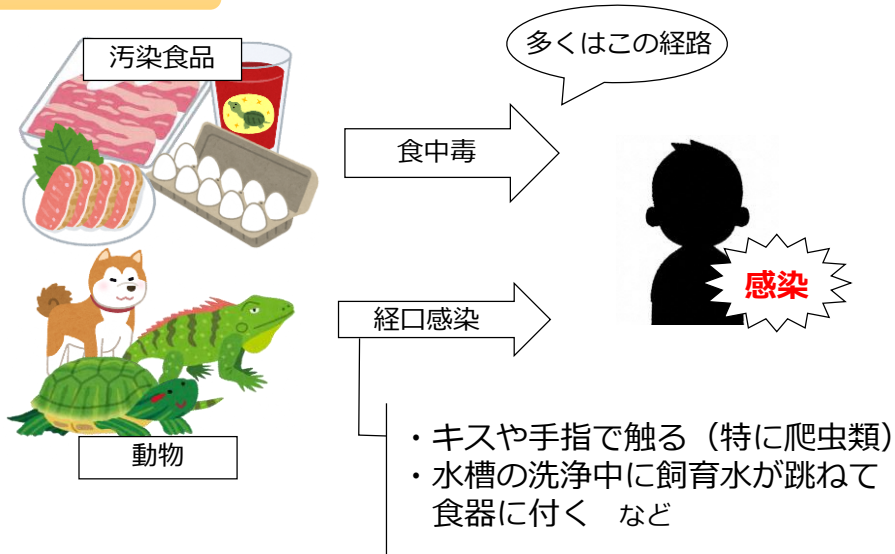


カメなど爬虫類
50%～90%

2006年～2008年 厚生労働省調査

サルモネラ症

感染経路

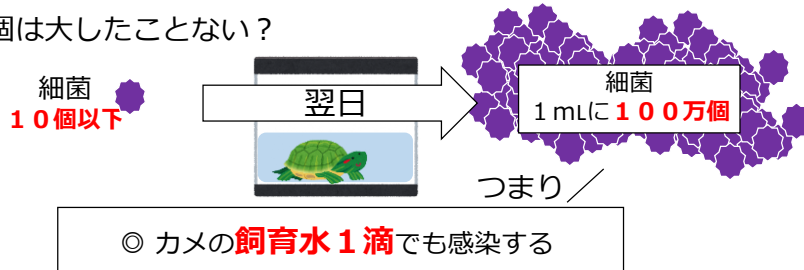


サルモネラ症

※どのくらい口に入ると感染するか



※100万個は大したことない？



→水槽やエサ皿の洗浄中に跳ねた飼育水が食器や食べ物、手指を汚染する

参考：中森純三、他：臨床と細菌；3：88~94、1976

サルモネラ症

発生状況

□ 国内：爬虫類を原因としたサルモネラ症はほぼ毎年発生

発生年	発生場所	原因動物	患者年齢	症状
1998	長野県	室内犬	4か月	腸炎
2003	宮城県	ミドリガメ	62歳	敗血症ショック
2004	秋田県	カメ	2か月 3歳	胃腸炎 胃腸炎
2004	千葉県	イグアナ	生後27日	腸炎
2005	千葉県	ミドリガメ	6歳2か月	急性胃腸炎、敗血症
2005	千葉県	ミドリガメ	1歳3か月	髄膜炎
2005	長崎県	ミドリガメ	6歳	下痢、嘔吐、発熱
2006	新潟県	ケヅメリクガメ	7か月	急性胃腸炎、敗血症
2007	東京都	室内犬	1か月	胃腸炎

□ 米国：1975年に約10cm未満のカメは販売禁止となった

サルモネラ症

人の症状



12~48時間



急性胃腸炎
嘔吐・腹痛・下痢

重症化

- 幼児～小学生
→敗血症、髄膜炎、意識障害
- 高齢者
→急性脱水、菌血症

死亡する事例もある

動物の症状

- 成獣：不顕性感染
- 幼若獣：元気消失、食欲減退、下痢など

回復してもサルモネラを長期間保菌・排出する

サルモネラ症

予防



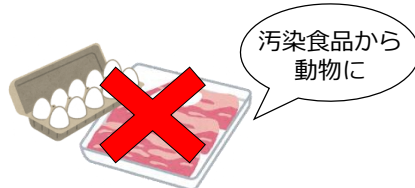
常在菌のため
動物から除去×



爬虫類のケージ等は
キッチンで洗わない



触ったら手洗い

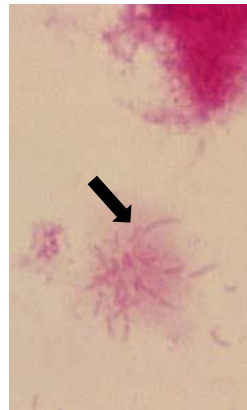


生肉や生卵を
動物に与えない

猫ひっかき病

病原体

- ・細菌 (*Bartonella henselae*)
- ・猫の赤血球内に寄生する



引用：日本細菌学会
<https://jsbac.org/youkoso/bartonella.html>

猫ひっかき病

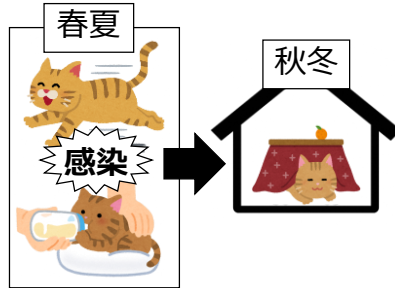
発生状況



飼育猫

- ・西日本
- ・3歳以下の若齢
- ・屋外飼育
- ・ノミ寄生あり
→複数該当する猫は注意

□ 症状：子供 >> 成人
特に20歳以下

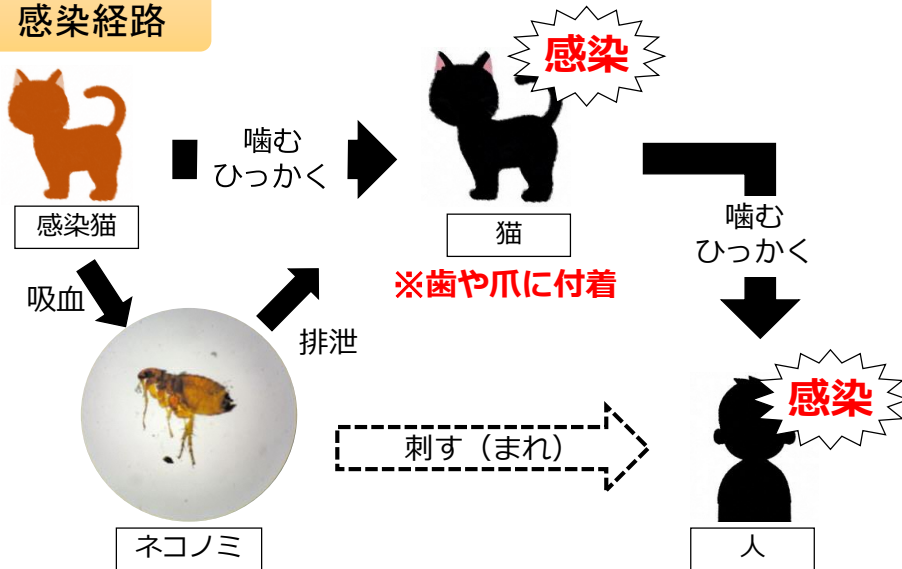


□ 秋冬に多い

- ・子猫を秋に迎え入れる
- ・屋外で感染し、冬に屋内へ

猫ひっかき病

感染経路



猫ひっかき病

動物の症状

無症状

2～3か月間（長いと1～2年）血液中に保菌する

人の症状



1週間前後

虫さされに似た病変形成



引用：<https://doctorvet.it/bartonella-henselae-malattia-da-graffio/>

1～2週間前後

**痛みのある
リンパ節腫脹**

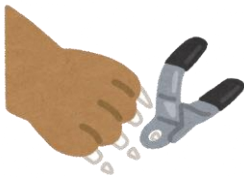
足の付け根、脇の下、首

自然治癒

猫ひっかき病

予防

一般的な衛生対策を行う



○定期的な爪切り



○猫によるケガは
洗浄と消毒



○猫（特に子猫）との
接触後は手洗い



○ネコノミの駆除

皮膚糸状菌症

病原体

- ・ Microsporium属（小孢子菌）
- ・ Trichophyton属（白癬菌）などの約20種類の真菌（カビ）



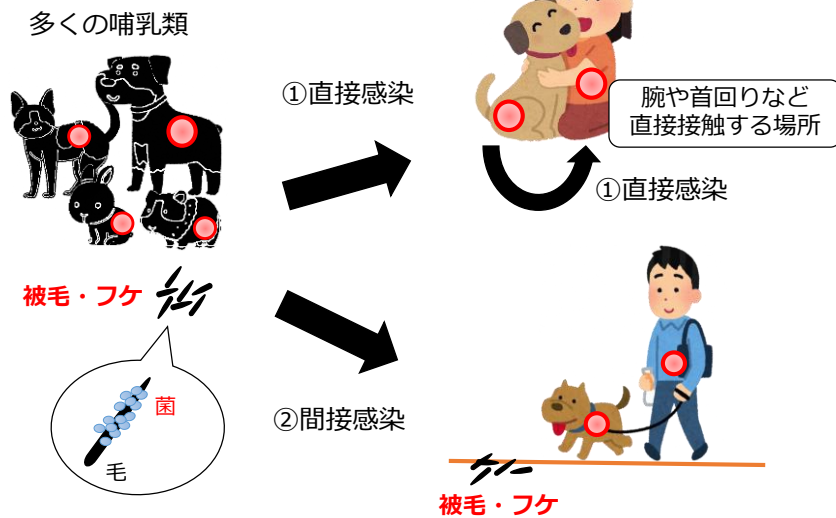
ケラチンを栄養として必要とするため
動物の**皮膚や毛で増える**

紡錘形が特徴（M. canis）

写真：臨床獣医師のための犬と猫の感染症診療
（緑書房）

皮膚糸状菌症

感染経路



皮膚糸状菌症

- ・健康的な動物は皮膚のバリアで守られているため感染しにくい
- ・若齢や高齢、免疫抑制剤の投与などで免疫力が低下し、皮膚のバリアが弱っていると感染しやすい

人の症状

皮膚表面に**円形・不整形の輪**や**水疱**を形成する



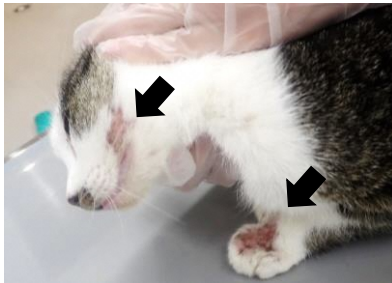
円形の脱毛・フケ・発赤を伴う皮膚炎
(**リングワーム**)

写真：臨床獣医師のための犬と猫の感染症診（緑書房）

皮膚糸状菌症

動物の症状

- ・**脱毛**や**赤み**、**フケ**、発疹や水ぶくれ、かさぶたなど
- ・顔や足先に限局する場合と全身性の場合がある
- ・**無症状の場合もある**（不顕性感染）



脱毛部と有毛部の間に境界がある

写真：山形市動物愛護センターるんるん ちゃん

皮膚糸状菌症

感染対策

皮膚病の動物を取扱う場合は**皮膚糸状菌症かどうか注意**する
疑われるなら、受診する／顧客から預からない

皮膚糸状菌症だった！



- ・感染動物
- ・抜け毛やふけに
触れない



or

- ・ベッド
- ・タオル
- ・グルーミング用品などは
廃棄or熱湯消毒



掃除で物理的に
カビ除去

レプトスピラ症

病原体

- レプトスピラ：らせん状の細菌
- 病原性と非病原性に分類され、250種以上の血清型がある
- 感染症法：4類感染症（診断した医師は届出）
- 家畜伝染病予防法：診断した獣医師は届出（牛・豚・馬・犬など）



病原体の特徴

- ・細長くらせん状
- ・先端がフック状に湾曲
- ・独特な運動

病原性レプトスピラの電子顕微鏡像

写真：国立感染症研究所

レプトスピラ症

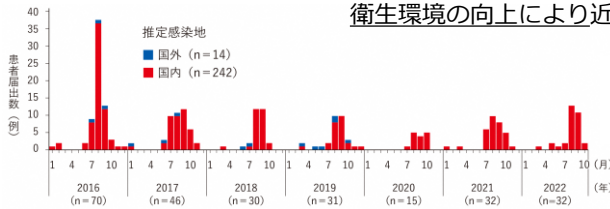
発生状況

犬：平均して**毎年30件**ほど発生

2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
52	35	37	24	23	22	26	35	27	38

人における届け出数推移 1970年代までは年間50人以上死亡

衛生環境の向上により近年では死亡者は減少している



**7～10月中心
水系感染が原因**

- ・水泳、カヌー等の水遊び
- ・台風や大雨による水害

図. 発症月別レプトスピラ症患者届出数の推移, 2016年1月～2022年10月
 (n=256, 発症月不明15例, 推定感染地不明1例, 発症月が期間外1例を除く)

IASA

レプトスピラ症

感染経路

尿や汚染された水・土壌が原因

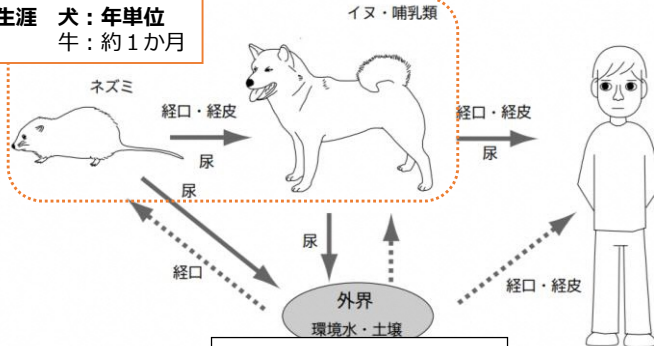
経皮：皮膚の擦り傷や粘膜（結膜、口腔粘膜など）から

経口：汚染した食物から

腎臓に**長期間保菌**

尿中に排出

げっ歯類：生涯 犬：年単位
豚：月単位 牛：約1か月



淡水や湿った土壌で
数カ月間生存できる

レプトスピラ症

感染経路

野ネズミ等のげっ歯類は**保菌動物**として重要
最近では、輸入動物による感染例もある

宮城県調査

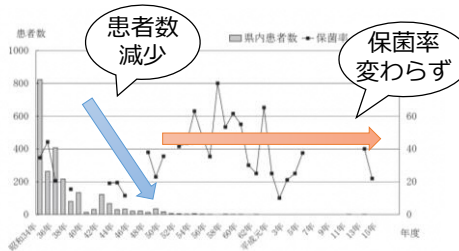


図1 県内の患者数と野ネズミのレプトスピラ保菌率

宮城県保健環境センター年報,第25号,2007より

- 2005年3月、静岡県の動物輸入業者が米国からアメリカモモンガ129匹を輸入
- 従業員が4月に1名、6月に1名レプトスピラ症に感染し入院
- アメリカモモンガ全個体を殺処分



- 輸入げっ歯類25種522匹の保菌状況を調査し、12種32匹で保菌確認

現在では輸入届出制により、**レプトスピラ症に感染したげっ歯類の輸入は禁止**

レプトスピラ症

人の症状



3~14日

風邪に似た症状
発熱・頭痛・吐き気
結膜の充血など

重症型

黄疸出血性レプトスピラ症
(一部の血清型)

- **黄疸、出血、腎不全**
- **死亡率：5~40%**

→**ワイル病**と呼ばれる

動物の症状

犬で特に重要！

犬：発熱、嘔吐、出血など。**肝不全、腎不全**に発展
治療が遅れた場合、死亡する場合がある
無症状のまま保菌・尿中に排菌し続けることも

レプトスピラ症

予防

① 犬：ワクチン接種を行う

5種混合

ジステンパー
犬伝染性肝炎
犬アデノウイルスⅡ感染症
犬パルボウイルス感染症
犬パラインフルエンザ



7種混合

ジステンパー
犬伝染性肝炎
犬アデノウイルスⅡ型感染症
犬パルボウイルス感染症
犬パラインフルエンザ
犬レプトスピラ病
(カニココーラ・イクテロヘモラジー)



引用；MSDアニマルヘルス株式会社

⇒ アウトドアに行くことが多い
河川敷などを散歩させる
レプトスピラが発生している地域

7種or9種混合ワクチン接種推奨

人と動物共通

- ② 生水を飲まない
- ③ (川や池など) 水中ではケガをしない、ケガがあれば入らない
- ④ 流行地域では不用意に水に入らない (特に洪水の後)

疥癬

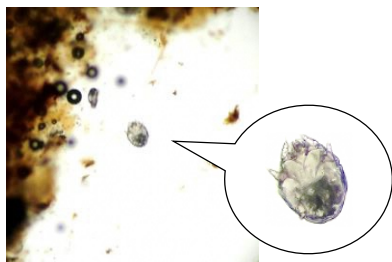
病原体

イヌセンコウヒゼンダニ

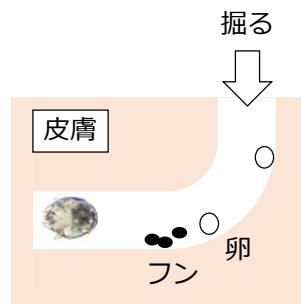
→犬、猫やその他の動物 (人を含め) にも感染

ネコショウセンコウヒゼンダニ

→基本的に猫、まれに人にも



猫から採取されたヒゼンダニの一種



ダニが作ったトンネルの中で生活し繁殖する

疥癬

動物の症状

通常はトンネル**1本**に**1匹**の成ダニ

- ・ダニ穿孔部に発赤、かさぶた、皮膚肥厚、脱毛など
- ・**非常に強いかゆみ**が出るため、掻いた場所から細菌感染

1本のトンネルに  **多数のダニ**が生息



脱毛と多量のフケ
皮膚肥厚・皸皮化
細菌感染の悪化（膿皮症や敗血症に）

写真：山形市動物愛護センターすばるくん

疥癬

人の症状

- 寄生部位に**丘疹や小水疱**（内部に水が貯まり隆起した小さな発疹）形成
- **激しい痒み**が特徴で
不眠や掻くことで外傷が生じ細菌の二次感染を受けることがある

予防

- 疥癬に罹患している動物と**接触しない**
- 感染したら早期に治療、完治するまで**隔離**する
- 感染動物に触れたら**速やかに手を洗う**